恵南森林組合

調査団体名	： 恵南森林組合	団体代表者名	： 山内章裕
設立年	： 1999（平成11）年1月（5組合合併）	対応してくれた人の名前	： 大島徳雄 専務
団体URL	： http://k-nan.jp/		
活動拠点	： 岐阜県恵那市 恵南地域	調査員	： 蔵治光一郎、近藤　朗、安藤里恵、田中五月
取材日	： 2013年12月11日	レポート作成者	： 田中五月、（近藤　朗 ）

活動内容

1999（平成11）年に上矢作町、串原村、明智町、山岡町、岩村の5森林組合の合併により誕生した岐阜県で3番目の広域合併組合であり、この恵南地域の83%にあたる約27,400ha（国有林 4,800ha、民有林 22,600ha）の森林を管轄している。事業は、これらの森林・作業道整備、特殊伐採が主である。2005（平成17）年度の組織改革後、国有林のみならず民有林の間伐増大、経営計画作成にも着手し、境界確定作業も担う。

●組織改革　・・・合併後、2004、05年度に赤字となり危機感が芽生え、2005年度（下期）より大幅な組織改革、職員の意識改革に着手した。2006年度から事業量増大を図り、民有林伐採にも着手、短期間で黒字に転換できた。

●東濃・森林づくりの会　・・・ 民間企業と協力した民有林整備体制の構築を目指し、特定非営利活動法人として立ち上げた（設立は2012年）。この串原支部が串原林業の三宅大輔氏であり、民間事業体として森林経営計画を策定した成功例である。

●森の健康診断　・・・ 矢作川森の健康診断の恵那地域第1回目（2006、07年）では、平均密度1,679本／haであったものが、第2回目（2012年）では1,360本/haに減少した。これは5年間でこの地域の間伐が著しく進んだということであり、恵南森林組合の事業転換（民有林増大）と重なる。

キャッチフレーズ

森の資源を活かし守り想う　～ それぞれの地域にフォレスターを!　～

会のモットー（何を大切にしているか）

環境に配慮した適切かつ持続的な森林管理を進めることで、組合員と地域社会に貢献するとともに、働く仲間とその家族の幸福を追求する。（HPより）　林業本来のあるべき姿を追求したい。

設立から現在に至るまで変化したこと

国有林伐採、治山事業など公共事業主体であったものが、経営危機（2004、05年度）を契機として民有林にもシフトしていったこと。この時（2006年度～）は、年度末に余ってくる補助金にはすべて手を挙げるなどして、事業量を大幅に増大させた。
なおこの頃には、経営改革として、組織も大きく変えた。職員自らが問題と向き合い、考えることが重要である。

連携している団体・専門家・自治体など

岐阜県森林組合連合会、東海木材市場、岐阜県庁

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動（例：小仕事づくり、山村・森林資源活用など）

●東濃・森林づくりの会をつくり、民有林の整備促進（支援）を進める

森林組合だけの整備能力には限界があり、多くの民有林の整備を進めることはできない。やる気のある民間と森林組合が手を組んで整備を進めたい。そのためには、森林経営計画を策定する必要があり、そのコンサル的な支援を行うための会として立ち上げたものである。
全体としては、まだ思うように進んでいないが、その中で串原林業は自ら経営計画を立てている。その代表である三宅大輔氏は、かつて恵南森林組合の職員であり改革期を経験している。
別パターンの手法として、森林組合が経営計画を立てて、作業を民間業者が行うケース（松下薪材）もある。

現在直面している課題

経営は持ち直したが、材価はまだまだ落ち込むと考えており、これからさらにどのような方向に行くのか悩んでいる。
大きな課題である。

今後やってみたいこと

国有林には森林官がいる。それぞれの地域、民有林にも、森林官「フォレスター」がいるような状況をつくりたい。そのような人材が地域の森林を見守り、育てていくというのが良い。

そのためには、地元の若者が林業に関わり、将来的に独立する流れが良い。
民有林では山主との関係性が難しいが、「あそこのせがれかー」という感じで受け入れられやすい。
（串原林業・三宅さんの「山主さんたちが協力的で作業がしやすい」という話と通じる）

一方、従業員募集には、Iターン者の応募が多い。

チームオリジナルの質問

＜質問内容＞ 今後、どのようなパートナーがほしいか？
＜答え＞
●材木のはけ口がほしい。いつまでも市場に出してて良いのかと考えている。市場に出すと、数日後にはお金が入るというメリットはあるが、手数料で金額が安くなるというデメリットも大きい。今は製材所などに直接卸すということができていない。

＜質問内容＞ 森の健康診断の1回目と2回目で、大幅に平均密度の数値が減少していた。これは、恵南地域で広域的に間伐が著しく進んだ結果である。面積的にも大幅に民有林に手を付けない限り達成できない数字であるが、なぜ、このようなことができたのか？
＜答え＞
●実際に民有林での間伐を進めたが、「組合がつぶれてしまう」という危機感が、これをできるようにした。
愛知県などでは、施業単価が高いため、わざわざ民有林に手を付けるということにはならないのではないか。

その他、伝えたいこと

●林業を実施していくにしても、地域に運送業者や機械（重機）業者、土建業者が必要で、できる限り地域の会社と協力して仕事をしていきたい。地域のリスク管理（災害、雪対策）でも、このような業者は必要であり、われわれは 地域と共存していかねばならない。

写真

恵南森林組合事務所（恵那市上矢作町）

取材に答える恵南森林組合の大島徳雄専務